

---

# 羽と私と天使のたはむれ

黒井琉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

羽と私と天使のたはむれ

### 【Nコード】

N0945L

### 【作者名】

黒井琉

### 【あらすじ】

ある日の午後、私は天使に出会った。

天使とある「条件」をもとに、羽を交換した。

そして私達は翔んだ。

川面が美しかった。

抒情小説。

川端に腰をおろして水が流れてゆくのをただ眺めていたら、隣に天使が来て、同じようにすとんと腰をおろした。

「随分と、大きな羽ね」

座るのに邪魔にならないのだろうかと思って聞いてみると、意外に困った顔つきで、

「羽は欲しくなかったのに、生まれたら、ついてたんだ」と言う。

「でも、最初は小さかったのでしょうか」

と聞くと、

「いや」

と真顔で応える。

「キューピットのようなボンボンとは違うんだ。生まれたら、もうこんなに大きな羽だったのだよ」

「くれる？」

と笑いながら聞くと、

「欲しいなら、あげる。但し、交換条件が必要だけどね」と優しいな面持ちのまま、応える。

「何を交換するの？私の命？」

「命は要らない。もう、持ってるから」

隣に座っているのは、天使なんだ。はっとして、まじまじと天使を見る。

金の巻き毛が風になぶられて舞っていた。同じく金のまつ毛は、これほどまでにとと思うほど長く、繊細で、マスカラでだってこんな風には塗りこめられない。高い鼻梁に窪んだ眼下は西洋の絵そのま。深い彫の中、整然としたまつ毛の下、ブルーともグレーともつかない瞳に金の光彩が差している。光の造形。

風の生ぬるさが心地よい。穏やかな陽の光。  
人間も、天使も、ただ水を眺めて、生きているこの日のことを覚えていようとしている。

「羽の手入れは大変？」

私は慎重に、聞く。

「そうでもないよ。川に入っても、あまり濡れないんだ。飛ぶ時も鳥にさえ気をつければ、雨粒にも強い」

水鳥か何かのような、羽なのだろうか。

「お風呂に入る時、邪魔にならないかしら」

「それは、気付かなかった」

びっくりしたような顔つきで、天使が応える。

「お風呂は。入ったことがないから分からないけれど、多分、ものすごく邪魔になるだろうね。日本のお風呂は、とても、小さい」

「銭湯に行けばいいわ。皆びっくりするだろうけれど」

笑いながら、私は応える。

水が滔々とせせらぎを立てて静かに目の前を流れてゆく。木々の梢が時折パキパキと音を立てて風に通り道を譲る。

新緑を見上げながら、私は応える。

「一度だけ、ならどうかしら」

「今、一度だけ、という意味？」

天使は、正直で、律儀だ。そして、残酷だ。

「そう、ただ、飛ぶだけ。羽があつて、そして自由に大空を、飛んでみるの。それだけ。」

「条件をのまなけりゃいけないよ」

と美しい唇をとがらせて天使が警告する。

「いったい、何？」

彼は、いや彼女だろうか、幼く、しかし大人びて、しかし人間とそう変わらぬ肢体をしたこの美しい絵の中から抜け出てきたそのま

まの恰好で、天使は躊躇いがちに囁く。

「キスがしたい」

私は真っ赤になって慌てて

「だめよ！」

と叫ぶ。

天使は笑いながら、私の右手にそつと左手を重ねて、右手は口元に静かに、と当てて、こう言う。

「君に、じゃない」

私はますます頬が熱くなるのを知る。

親切な天使は、彼らが恋や愛を知らぬことを告白する。

「生まれた時から、愛がどういうものかは知っている。だから、人間全てを愛しているんだ。でもね、男女の愛って何なのか、よく分からないんだ。何故、性が違うから、愛するのか、何故、男と女じゃなければならぬのか、何故、人は特別な人を愛するのか」

私は首をふりふり応える。

「私は、愛なんて知らない」

「嘘つきだなあ。君は。ちゃんとして、胸の内に、秘めて、奥底に隠してある」

「何も隠したりしてないわ」

「それも知ってるさ」

高らかに誇らしげに天使は大きく羽を伸ばす。優雅で、クジヤクの雄が羽を広げるように機敏で、そしていかにも飽き飽きして退屈だといわんばかりに。あくびをする代わりに、彼ら天使は羽を広げるのだ。

「なら、羽はくれないのね」

少し、残念に思いながら言う。

「いや、一度だけ。そして、一度だけ、キスをしてくるよ。君の愛する人に」

「佐藤君なら、愛してないわ。好きよ。でも、憧れ。ただの、女の子の淡い初恋」

「そうじゃないよ」

いたずらっ子の目つきで、天使がウインクするのがたまらなく魅力的だった。

「じゃあ、一体誰？」

「そのうち、分かるよ」

天使は、私の肩甲骨当たりになんと手を触れた。暖かな温もりが体の芯から痺れるように伝わってくる。

「キスしてきてもいいなら、羽を貸してあげる。君次第」

YESなんて言わないのに、どんどん肩甲骨の痺れが甘美な音楽が沁み渡るように、熱くなる。今何かが、私の内側から、外側に向かって蠢きだし、そして。

「これからどこに行くの？」

「さてね。秘密の方が、楽しいことの方が多いと思わない？」

と、やはりウインクする。

「君は自由にしていいよ。好きなだけ。そうしたら、戻ってきて、また交換しよう」

私は明るい日差しの下でぼんやり大きな羽を広げながら、それだけで穏やかで幸福であることを知る。私は。生きている。

呼吸することが、こんなにも楽しいだなんて。肺から吸い込まれた新鮮な空気が体中を満たし、羽が大きく動く。暫く、羽がどんな風に動くのか試そうとして、ゆったりと、常より大きく、私は息を吸っては吐く。

ごろりと横になってみても、羽はふんわりと羽毛布団のような心地よさで私の体を包み込む。ただそれだけで、眠りに引き込まれそうな、魅惑的な時間。

川のせせらぎがバツクグランドミュージックとなつて、太陽がランプのように私を照らし、そして風のさやぎがただひたすら私を幸福の彼方へと引き寄せようとさやさやと耳元をなぶる。

暫くそうして、全身にみなぎる光の渦を体感しながら、今度は水

際まで足を延ばす。

ワンピースが塗れようが、構わない。後で翔んで乾かすのだ。  
ミュールもストッキングも全て脱いでしまって、薄いワンピース一枚になっても全く寒くはなかった。花曇りという名の月のもと、少々の寒さにもかかわらず、羽織っていたものを全て放り投げた。天女が水浴びをするように。

ちやぶちやぶと水辺に足をつけていると、緑の木漏れ日の中から大きな天使が顔を覗かせる。

「彼はミサにいたよ。悼ましい、しかし僕らにとっては喜ばしい、ミサの中。」

私は黙って微笑みながらその顔を見上げる。

「近づいて行って、君の愛を彼に与え、キスしたら、とても吃驚した顔をして、逃げてしまった。人間にとっては、さぞや大変な出来事だったろうね。」

さもおかしげに、羽のない天使が言う。

「ここに来て、また座ったら？」

「君はまだ、飛んでいないだろう？」

「今度は、半分こにしましょう。あなたが、私を空に引き上げて頂戴」

天使は笑いながら、

「人間はズルいなあ」

と言う。楽しげに。

「この羽は、大きすぎるわ。私には」

「そうでしょう？だから僕はいつも不満なの」

不思議と、愚痴めいた非難めいた調子でこう天使が応えるのを見るのが愉快だった。

彼、のような人間に彼、がキスをしただろうか。いや、それとも、天使に性別など関関ないのだろうか。

「どうだった？」

と聞くと、難しい顔をしながら、

「やっぱり、よく分からない。ただ、素晴らしいのだろうと思った。人間じゃないから、よく分からない」

とだけ言う。

「じゃあ、今度は人間になったらいいわ」

今度は悲しげな顔をする。

「もう、知ってしまったから、人間にもなることはできないね。君の愛と、彼の愛は、素晴らしいものなのだよ」

そう、と私は一人語ちる。

「それに、半分だけ、遺してきた。君の愛は、まだ完璧に至ってないから。多分これから、色々な愛を君は経験するだろう、そしたら、彼もまた知るんだろうね。なにが、完璧か」

「まるで、うぬぼれ屋ね。」

私が笑うと。そうだと満足げな面持ちで、天使がまた隣に座る。

岩の上に腰をかけて。同じように水辺に足を浸しながら。一緒になつて淡い淡い波紋を広げていく。

「人間になるには、僕は余りにも多くのものを背負いすぎているんだ。この羽のようにね」

頷きながら、それでもよく分からないままに、ただお互い水をかけ合い続ける。

新緑の木の葉が一枚、また一枚と、ひらひら舞い落ちる。花が膨らみ、ポンと音を立てて開いては、またさやさやと散っていく。

「少し、今日はサービスだよ」

と、美しい天使が緑に向かって手を伸ばす。

「本当は、こういうことは御法度なんだ。でも、君は自分の一番大切なものを、惜しみなくくれたから、だから、いいことにしておくよ。神様には内緒だ」

花の咲かぬ枝に花が咲き散ることも、また天使の御心のうちなれば、従おうと、美しい景色に酔いしれる。



ポン、と咲いて。またさらさら、散る。

「たまには、いいんじゃない」

私はやはり笑いながら応える。

天使が先程よりも幾分薄ぼやけた羽を背に私の手をとって向こう側へと引き上げる。

従順にその手を掴み、空高く、私達は引きあげられる。

「神様のところへは、まだ行けないよ。太陽の真下へも。君に行ける所まで、行こう。」

私は頷く。微笑みながら。

太陽は明るく、静かだった。妖精たちが緑の梢から顔を覗かして、ひそひそと私達を覗き見していた。

羽のある人間と、羽が半分になった天使とが、手をつないで天高くかけのぼっていく様を、彼らは噂していた。

「一体全体、最近の天使ときたら。」  
きつとこんな風に彼らは子らに伝えるのだろう。かまやしない。

ただ、風を切る冷たさが、心地よかった。

白い叢雲が辺り一面をゆったりと流れゆく。その隙間に見えるア  
クアブル！。

光が差している。

白い何十層にも分かれたれ、何次元にも渡った雲間から、眩しい灯りが私達の下へこぼれかかってくる。光の洪水に吞まれていく。吞まれていく。吞み込まれていき。

ただ、全てが流れゆく様の中をたゆたっている。ただ、全てが流れの間に間に、現象しているのを、私は見ている。ただ、全てが流

風が凧ぎ、川辺を水が滔々と流れていく。

ただ、私達は言葉もなくそれを見つめていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0945/>

---

羽と私と天使のたはむれ

2010年10月8日15時12分発行